

株式会社さくら都市総合研究所

清水 秀幸
主席
研究員17 都市の景観を
考える

市街地を例にとると、東西に縦断するようになり、その水路と枝水が縦横無尽に配されている。残念なことに、これらの大半はいまだ暗渠（あんきょ）に閉ざされ、鉄板やコンクリートの重い蓋に覆われたままになっている場合が多く、景観構成上の役割としては、極めて乏しいのが現実である。

筆者はこれを景観資源、観光資源として再生できないものかと思うのである。

東京都は東京五輪の終了する2020年に、日本橋上空を走る高速道路（首都高）を地下化する事業に着手

する。前回開催された東京五輪は（20年から数えて）56年前の1964年。その1年前に待たなしの状況の中で、首都高の完成は国の威信を懸けたプロジェクトであった。

その中で、用地買収費用やロスタイムを抑え込もうと選択したルートが、河川や緑地の上空横断という手法であった。

その結果、半世紀以上にならないうちに、それらによる都市景観の損失が話題となってきた経過がそこにある。

今回の首都高の地下化は、長きにわたる損失を取り戻し、日本橋が国の重要文化財とし

ての地位を取り戻すことに加えて、その周辺の川沿いにレストランやカフェの並ぶ親水空間として再生し、新たな観光名所として蘇（よみがえ）らせようという計画である。

（続く）

清水 秀幸氏（しみず・ひでゆき）1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか6委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長



市街地を流れる整備された用水（長野市県町付近）